増える「ネット活用受験生」

講義や過去問の配信サービスが充実

インターネットを通じてオンラインで提供される教材を使い勉強する受験生が増えている。予備校の講義や大学入試の過去問が配信されるサービスが充実しつつあり「いつでもどこでも何度でも、低価格で」利用ができると人気だ。ノートパソコンやスマートフォン（スマホ）をカフェに持ち込んで受験勉強する生徒も出始め、新たなスタイルとして注目されている。

●カフェでスマホ

1浪中の安井真弥さん(19)は私立大の受験を控えて猛勉強中だ。毎日のように通う場所は予備校でなく、横浜市内にある「勉強カフェ」。有料の個人スペースだ。席につくと、参考書とノートを広げて、スマートフォンで動画投稿サイト「ユーチューブ」に接続。予備校が無料で公開する講義を見ながら、参考書を読み込んでいく。「一人で参考書を読むだけだと分からないところがあるけれど、講義を見ると、理解が進む。自分のペースで進めたり、戻せたり、止めたりできて、実際に受講するよりも便利」と話す。

安井さんは移動中や就寝前のちょっとした時間もスマホを使って英単語を覚えたり、日本史のキーワードをチェックしたりする。細切れの時間も受験勉強に活用するのだ。アプリはすべて無料。「予備校に通うと年に数十万円がかかる。大学に入ってからのことを考えると、浪人中に親に金銭的な負担をかけたくない」と理由を話す。自らを励ますアイデアも。日々の学習時間をオンラインで公開し、同じように公開している受験生と比べることで「やる気を出している」と言う。

安井さんが通う勉強カフェはブックマークス（東京都渋谷区）が運営する。社会人を対象にした学習スペースとして2008年11月にオープンした。昨年8月、社会人よりも安価な月額8400円で受験生に開放したところ、30人弱が会員として登録。広報を担当する隈田亮太さんは「一人で問題集を解く従来型の受験生もいるが、パソコンやスマホを使って学習する新しいタイプの受験生も増えている」と話す。オンラインによる学習に支障が出ないように、各席は電源が備え付けられ、カフェ内は無線LANが利用できる。

イヤホンをつけ、スマートフォンで予備校が無料で公開する講義を見ながら、参考書を読む安井真弥さん。「目の前に講師がいるようだ」と言う＝横浜市中区の「勉強カフェ横浜関内ラーニングスタジオ」で

●無料提供も多く

リクルート進学総研の小林浩所長はオンラインを活用した新しい学習のスタイルを「スマ勉」と名づけて注目する。リクルートマーケティングパートナーズ（同千代田区）が運営する会員制のオンライン予備校「受験サプリ」はウェブサイトなどで、無料会員に大学入試の過去問題や模擬試験、問題集を提供するほか、有料会員（月額980円）に予備校講師の講義の動画を配信する。12年9月のスタートから今年1月までの無料会員数は100万人を突破。「今年度の受験生の2人に1人が使っている計算」（総務広報グループ）という。

リクルートが利用時間を調べたところ、午後9時～午前0時が24％で最も多かったが、正午～午後3時が12％▽午後3時～同6時は15％▽同6時～同9時も20％と各時間帯でほぼ平均しており、自宅のほか学校への登下校中、休み時間に使われていたという。小林所長は「高校生は部活動などで忙しい。予備校が近くにない場合もある。オンラインのサービスはいつでも、どこでも、何度でも使うことができ、高校生が学習に利用するようになった」と分析する。

通信講座「進研ゼミ」を提供するベネッセコーポレーション（岡山市）も、4月からオンラインを使った学習分野に本格的に参入する。専用のタブレット端末を使うサービスだ。これまでは月に1度のやり取りによる添削が中心だったが、利用者にタブレットを配布し、インターネットで質問を受けつけるという。早ければ翌日中の回答が可能になるといい、成島由美家庭学習事業本部長は「学習の状況を細やかに把握し、データを分析することで、レベルにあわせた対応ができる。双方向性の高いサービスを提供したい」と強調する。小学校から高校まで、約80万人の利用を見込んでいるという。

【水戸健一、写真も】

米の授業配信へ翻訳プロジェクトが進行

オンライン学習のサービスは国内で増えつつあるが、海外に比べると環境整備は遅れている。その状況を改善しようと奔走する関係者もいる。

米国のNPO法人が提供する「カーン・アカデミー」は小学校から高校までの各教科で計5000本以上の授業を無料で公開している。

授業が基礎的で分かりやすいと、スペイン語、中国語など10カ国語以上に翻訳され、各国の学校で授業に使われたり家庭学習に活用されたりしているが、日本語には訳されていない。

このため、国内の教育関係者がインターネットを通じて小口の寄付を募る「クラウドファンディング」で資金を集め、翻訳しようとしている。

最初の目標は、高校の数学（比例、割合、証明）。翻訳費用は180万円で、これまでに達成のめどが立ったという。今後、9月まで5回に分けて数学の他の分野の翻訳をする費用の寄付を募る予定だ。プロジェクトを進める森田正康さん（ヒトメディア社長）は「子供の学習の選択肢を増やしたい」と意気込んでいる。